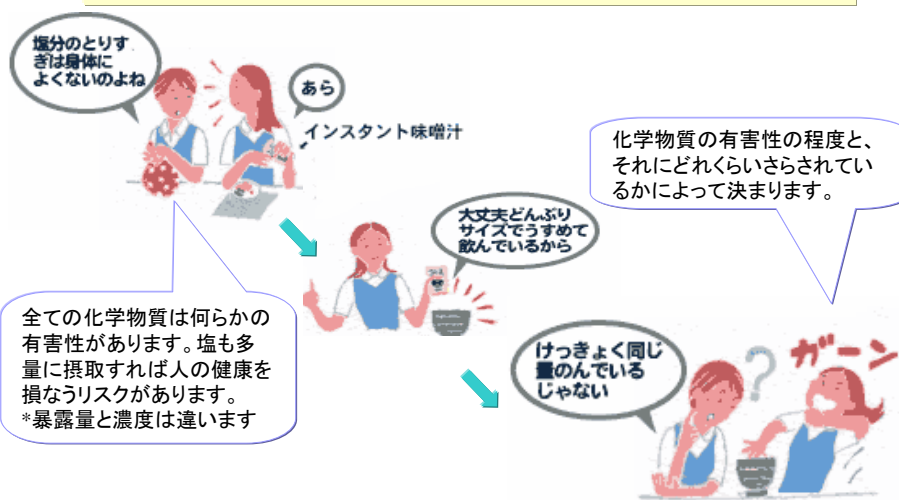


化学物質のリスクマネジメントと リスクコミュニケーション

関東学院大学 織 朱實

リスクとは何か

化学物質のリスク = 有害性 × 暴露量

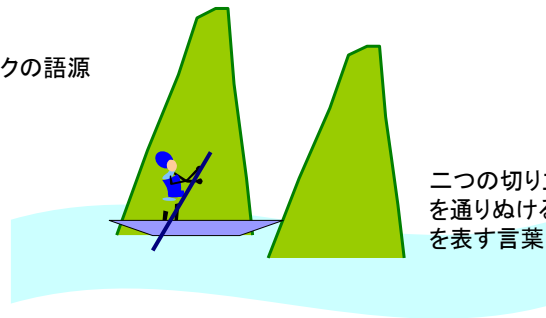


リスクとは何か

リスク=有害性×暴露量

よくないことが起きる可能性

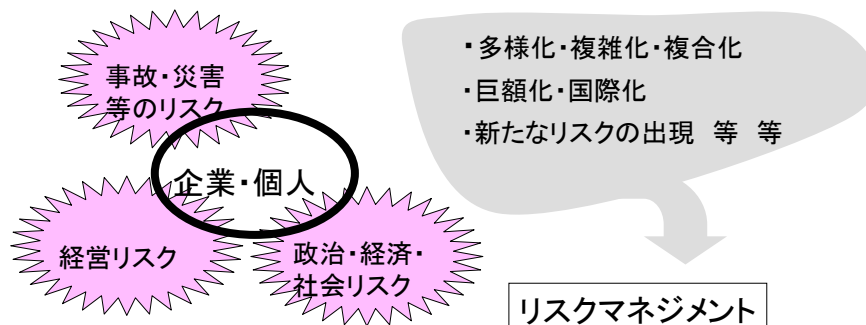
リスクの語源



二つの切り立った山の間を通りぬける小船の様子を表す言葉

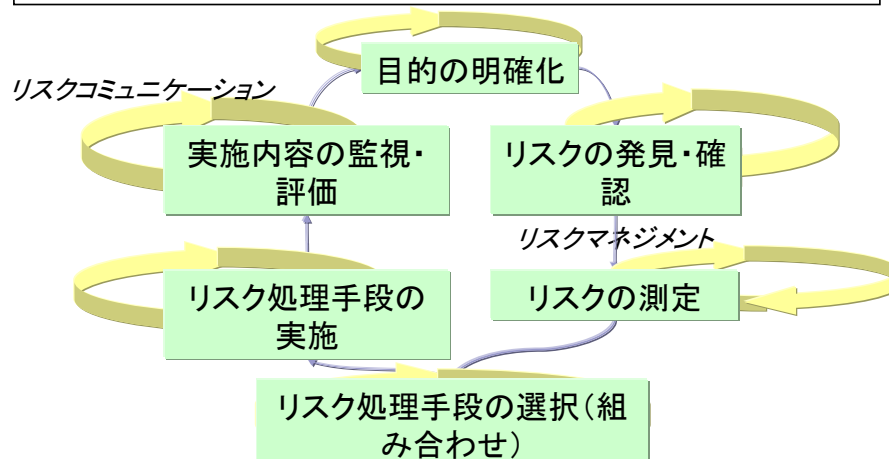
リスクとは リスクマネジメントから生まれた概念

優先的に取り組むべきものを決定するため、便宜上使用概念。(唯一無二の正解はない)



リスクマネジメントとリスクコミュニケーション

各ステップで、リスクコミュニケーションの実施が必要



リスクの多様化による変化

過去のリスクマネジメント

自然災害(津波・地震): 専門家・行政が管理
化学物質(事故・被害): 事業者・行政が管理

↓
住民に公表・協力を要請

↓
不確実・便宜上のリスクのマネジメントを
行政、事業者間で責任を負うことは難しい

リスクコミュニケーションの 限界と難しさ

リスクコミュニケーションとは？

個人、集団、組織間でのリスクに関する情報
および意見の相互交換プロセス

(National Research Council による定義 1989)



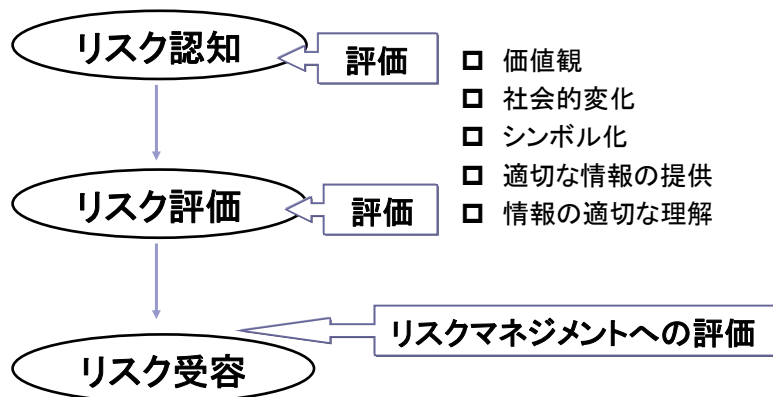
成功 = 関係者間の理解と信頼のレベルが向上

リスクとリスクコミュニケーション

リスクの受け取り方は、個性・人生経験で大きく変わるが、他の情報を得ることで限りなく近づく



リスク受容決定の要因



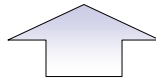
リスクコミュニケーション概念の変遷

(Leiss. B 1996)

技術的なリスクメッセージ提供の段階
(1975~1984)

説得のためのメッセージの工夫の段階
(1985~1994)

対等な立場でコミュニケーションを図る段階
(1995~)



知る権利 + 民主主義的手続公正の概念

リスクコミュニケーションはなぜ必要か

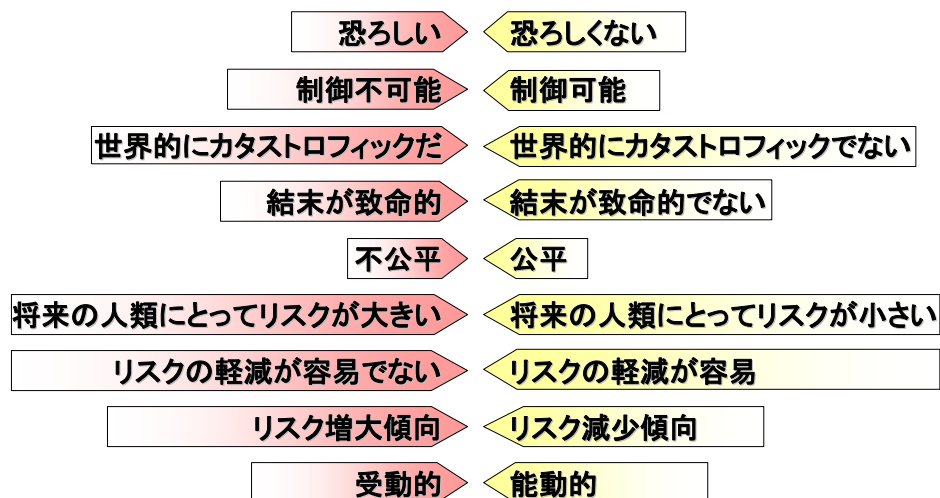
関係者が納得するリスクマネジメント手法の選択

- 紛争の長期化の回避
- 住民の新たな視点による情報提供
- 将来の紛糾の回避
 - 紛争の長期化の回避
 - 住民の新たな視点による情報提供
 - 将来の紛糾の回避

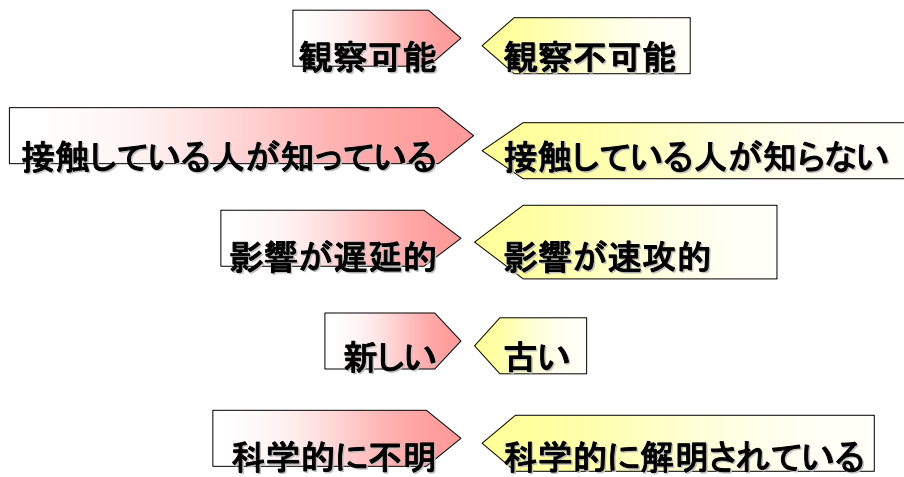
なぜリスクコミュニケーションは難しいのか

- 不明確：リスクの概念がわかりづらい
- 確率：リスクの感じ方が人によって異なる
- レベル：閾値のないリスクが対象となる
- コミュニケーション能力・技術
：当事者のコミュニケーションスキルの不足

恐ろしさの因子を構成する尺度 (Slovic, 1897)

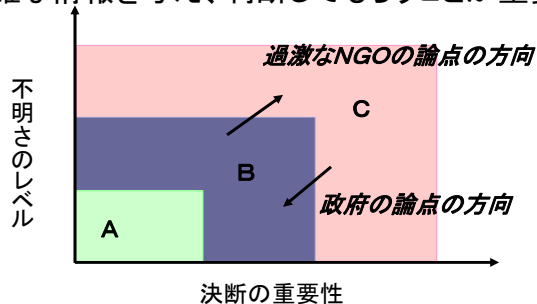


「未知性」因子を構成する尺度 (Slovic, 1997)



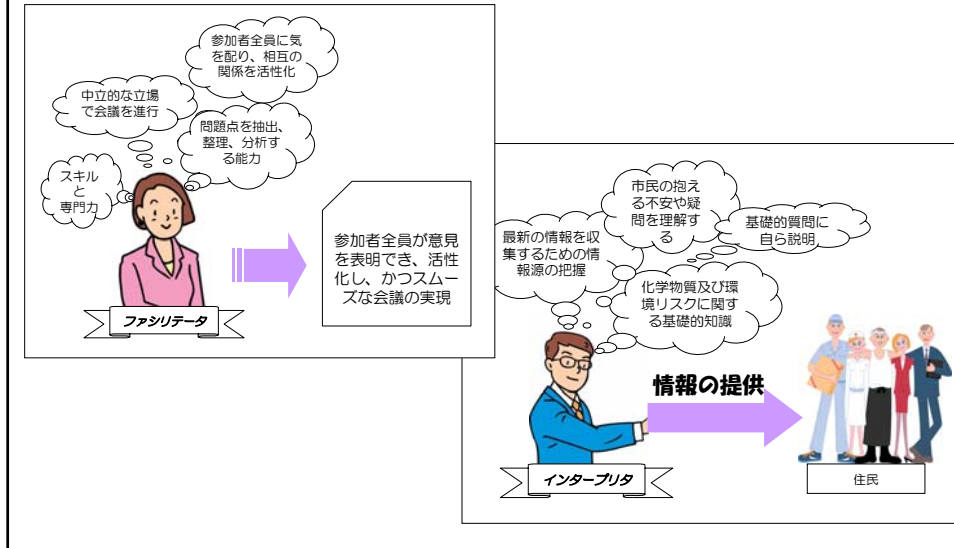
問題の認識と対応方法の相違

リスクコミュニケーションがモラルコミュニケーションにならないよう、的確な情報を与え、判断してもらうことが重要



- A: technical discussion 技術的対応ができる部分(明確なリスク)
- B: medical discussion 高度の技術が必要とされる部分(不明確なリスク)
- C: world view discussion 事実よりも政治的、倫理的判断が必要な部分(多様な利害関係が関わるリスク、次世代をも巻き込むリスク)

ファシリテーター・インタープリター



企業に対する質問「近隣の化学企業に対する20の質問から」

家、職場、学校にいる家族に悪影響を与える可能性のある、どのような化学物質をオンサイトに保有しているか？

工場からの排出の最悪のケースにより人が死亡する可能性のある地域の広さはどれくらいか？

センサーや警報機によりわれわれが化学物質の排出を知ることができる（特に夜間）ということをどの程度確信してよいのか？

最悪のケースの排出の場合、消防士、救急医療施設、病院は何人の被害者を扱うことが可能なのか？

リスクコミュニケーションと クライシスコミュニケーション

以下出典元:「健康危機管理時におけるクライシスコミュニケーションマニュアル」、厚生労働科学研究費補助金(平成19年~20年度)「健康危機管理におけるクライシスコミュニケーションのあり方の検討」班(研究代表者 吉川肇子)

パニック「神話」

パニックが起こるほとんどない

- 緊急時には、人々はパニックを起こすとしばしば考えられている
- しかし、むしろ次のようなバイアスがあることに注意すべき
(楽観主義的バイアス)「自分だけは大丈夫だろう」
(正常化バイアス)「これは大変な自体ではない(通常時と同じ)」
- 人々のリスク認知を高めることは非常に困難

予言の自己成就

- 「パニックが起こる」と思うことがパニックを引き起こすことがある
例) 1973年 トイレtpペーパー騒動

「思い込み」を持たないことの重要性

- ①パニックが起こるといふ誤った信念を持たない
- ②機関からは曖昧な情報は提供しない

危機管理の専門家が人々の反応に対し持つ誤解

- ① 人々はパニックを起こす → 稀な状況でしか起こりえない
- ② 警告は短くすべき → 緊急時には詳しいメッセージが必要
- ③ 誤報が問題 → なぜ誤報になったかという説明が重要
- ④ 情報源はひとつにすべき → 多様な情報源からの一貫した情報を得ることで、a) 情報の意味と状況を理解し、b) 警報の内容を信じるのが可能
- ⑤ 人々は警報の後、直ちに、防衛行動をとる → 行動する前に、友人やニュース、当局などに対して情報の確認をしようとする
- ⑥ 人々は自動的に指示に従う → 人々は情報の意味がわかるまで動くことはない
- ⑦ 人々はサイレンの意味がわかる → サイレンの意味を覚えている人は少ない

報道対応の注意点 (Feam-banks.2001による)

やるべきこと10か条

- 答える前に全ての質問を聞きなさい
- 日常語を用い、専門用語を使ってはならない。もしレポーターが専門語を使ったとしても、インタビューが専門的な出版社でないかぎり、普通の言葉を使いなさい
- 冷静で丁寧でよく答え率直でポジティブで正直で配慮があり、そして必要なら後悔していること、謝罪の気持ちがあることを示すような態度を保ちなさい
- レポーターの仕事を理解しなさい。締め切りを尊重し電話を直ちにかけなおしなさい
- レポーターを組織の良いイメージを保ち、復活するためのパートナーをして扱いなさい
- 真実を言いなさい。誤解を招きやすい、あるいは故意に除外された事実もまた虚偽の形である。
- レポーターの目を見なさい。答えるときにはもし可能であれば各レポーターに名前を話しかけなさい
- 自分の持っているクライシスコミュニケーション計画を使いなさい
- 危機に詳しい人を組織の中で確保しておくこと。彼らが自発的にスポークスパーソンになるかもしれない。

やってはならないこと10か条

- 弱気にならないこと
- 推測したり検討をつけようとしてはならない。その事実をあなたが知っていると、そうでなかりうと。
- 発言が思いどおりに引用されなかったとしても、過度にあわててはならない。
- メディアの中でえこひいきをしてはならない。常にひとつの新聞、テレビをえこひいきする状況はよくない。
- 新聞から広告を撤退させてはならない。
- ニュースリリースが絶対と考えてはならない。記事に変更して書かれることもある。
- いったん発表したことに矛盾がない程度に固執してはならない。メディアはことが変わることは理解している。
- 未来について断定しようとしてはならない。
- サングラスをかけたリガムを噛んだりしてはならない。
- 取材されているときにタバコをすってはならない。